

第十一回 ブックショートアワード(短編小説) 応募作品

作品タイトル…後の扉

元にした作品のタイトル…掟の前で

著者名…井邨灯(いのむらとう)

あらすじ

就活中の主人公は、ある日自分の体が自動ドアに反応しなくなっていることに気づく。自動ドアの開閉に導かれて仕事に就くと、職場となる部屋には開かずの扉があった。後悔が彼を満たした時、扉は就活中だったあの日へと開く。しかし彼はもう一度、運命のようなその扉の本当の向こう側を目指すのだった。

特記事項

フランツ・カフカの『掟の前で』を翻案した作品です。現代的なモチーフに導かれて、カフカの短編とはまた違った物語となりました。立ちほだかる自動ドアは就職活動に悩む学生を不思議な仕事へと導いていく。それは果たして彼の運命だったのだろうか。

ショートムービーとしてはセリフが少ないですが、扉と相對する印象的な画と、自分の人生と向き合う緊張感が伝わるように五千字の短編としてまとめました。

本編の文字数…4581字

後の扉

就職活動に疲れ切っていたある朝、俺は見えない壁にぶち当たった。比喻じゃなかった。くたびれ始めたリクルートスーツを内側から辛うじて支えるだけの俺は、その場にいても簡単にくずおれた。

自動ドアだった。いつも通るアパートの一階、外の世界から我々住人を守る透明なガラスの扉……もはや意識することもなく、日々通り抜けてきたその場所に突如として行く手を阻まれた。尻もちをついた状態で透明な壁を見上げる。ゆっくと立ち上がってその隙間に触れる。センサーの下で手を振る。バカバカしい。それでも扉は開かない。

故障だろう。少しだけ離れてまたスマホを開く。時間には少し余裕がある。とりあえず大家に連絡するか……。壁際に立っていると一人のサラリーマンがやってきた。自分には見向きもしない。そのドア壊れてるみたいっすよ、なんて声をかけようとはその時考えなかったように思う。俺はただ横目で追いかけた。その人は、何事もなくドアを通過して出て行った。

どうやら自分の方がおかしいらしいと理解するまでには数日かかった。ドアの故障ではない。俺だけが時々、だが確かに自動ドアに認識されず、立ち往生する羽目になる。おかげで自動ドアを通る時は注意して進むようになった。可能な限り誰かの後ろについていく、開いている時に通る、いつも通るとこは別の通り道を確認しておく。朝はサラリーマンの出勤時刻に合わせて家を出る。そうした生活を繰り返し、ようやくある企業から内定を貰えた頃、ふとこの問題に向き合おうという気が起こった。

その日から調査を始めた。どこを通ったか、どこを通れなかったか。時間帯、場所、ドアの特長などを記録していき、条件ごとの通過成功率を調べる。休日に都内を歩き回り、自動ドアをくぐり続けた日もあった。しかし何も見つからなかった。ドアごとの結果も日ごとの結果も全く不規則に思えた。

「お前、就職先決まった？ 内定いくつよ」

大学で友人に言われて気が付いた。自動ドアの一番大きい個性、ドアを作ったメーカーだ。

俺はすぐに型番を調べに出かけた。過去にも遡ってデータを追記していく。……見つけた。問題が起こっていた自動ドアのメーカーは、複数ある会社の中でただ一つだった。会社について調べる。概要、施工事例、そして採用情報。こんな時期でもまだ間に合うのか、驚いた。珍しいと思ったが、そうだろうとも思った。俺はその会社にエントリーした。

面接の日、俺は他の就活生と一緒に待合室に通された。数十分おきに十数人が次の場所へと案内されていくらしい。座って待つ。就職活動、これが最後の面接だ。結果がどうあれ、以前内定を貰ったところに行くとは他の人にも伝えてある。

自分の番を待ちながら他の就活生を眺める。俺みたいな奴が他にもいるだろうか。

会社の人が来て、自分とその他大勢が立ち上がる。列になって進む。次の場所まで無駄に距離があると感じた。階段を上がって、廊下を曲がって、そして自動ドアを通る。自動ドア、また自動ドア。さらに自動ドアを……通る前に、俺は立ち止まった。列から外れる。数人が怪訝そうにこちらを見てきたが、皆すぐ前を向いてついていく。ドアが閉まる。俺の鼻のすぐ先だ。

振り返って弾かれたように走り出した。来た道に戻る。自動ドア、ここは通れる……。階段を下りる、廊下を曲がる、また自動ドア……。ここはダメだ。通れなかった。横に折れて別の道に進む。そうやって進み続ける。会社のビルのどのあたりにいるのか、正直よく分からなくなってくる。だが迷子だという感覚はない。通れば進む、通れなければ別の道へ。そうするしかない、俺は正しい道しか通ることができないのだ。

そうやってビルの奥まで入り込んでいった。そこが奥だと分かるのは、照明が少ない薄暗い廊下で、もはや誰もいないからだ。どんどん暗くなっていった。もう少し暗かったらスマホの懐中電灯機能を使わなければならなかっただろう。微かに見える廊下の先に、自動ドアのセンサーのランプが小さく光っていた。近づいてくるが、ガラスの先は真っ暗で何も見えない。ドアに触れた。こちらだと思ったが、違うのか……。あたりを見回したその時、ドアがゆっくり開いて眩しい光がさし込んできた。

白い部屋だった。今通ってきたのと同じような扉が奥にもあって、そちらの先も真っ暗だった。肩で息をする俺を鏡のように映している。そのすぐわきに男が一人いて、俺を真っすぐに見つめていた。一瞬立ち止って、それから部屋の中に入る。後ろでドアが閉まっていく音がした。

ここで働かせてください、俺はそう言った。男は問う。

「君の生涯にたった一つだけ扉があるとしたら、それはいつだ？」

奇妙な質問だ。「どこ」じゃなくて「いつ」なのか。一瞬考えた後、採用面接での回答として間違いでないと思われるものを選んだ。今だ。今、現在、俺はあなたの前にいて、俺の人生の次の時間へと入ろうとしている。

男は俺の回答について何も言わなかった。俺が何を言おうと関係無かったように無表情で説明をする。明日から好きな時に来い。仕事は、ここに好きな時に来ることだ。扉がそこにある。……それだけ言うと、男は何も話さなくなった。俺も、何も聞かなかった。そして、俺は入ってきたのと同じ自動ドアから帰っていった。

次にその部屋に入った時、男はいなかった。あれ以来、会うことは無かった。部屋の奥にある自動ドアは開かない。その部屋には他にも複数の扉があった。どれも開かない。だが、奥にある自動ドアこそ、男の言っていた扉に間違いないだろう。

俺はその部屋に通った。タイムカードは無かったが、俺は会社の始業とともにその部屋に入り、終業とともに帰宅した。その部屋には時々他の人も来た。俺と同じように入口から部屋に来て他のドアを確認する。それだけだ。彼らも俺と同じ仕事をしているのだ。

部屋勤めの人間は俺を含めて三人だった。時々顔を合わせる事があったが仕事の話はしなかった。ある日、退勤しようとした俺に、別の会社に移ることにした、と一人が言った。そうして部屋勤めの人間は二人になった。ある日、俺が出勤すると、別のドアからもう一人が入ってきた。今まで開くことの無かった場所だ。彼は、別の部署に移ることにした、と言った。俺だけが残った。別の部署に繋がる扉は開くようになっていたが、俺はそこを通らなかつた。

未だ開くことのない部屋の最奥の自動ドア、あれは結局俺だけのためにあるのだと思つた。必ずその扉を開かなければならないと思つた。

ドアの前に立ち続けた。練習も欠かさなかつた。自動ドアに自分を見つけさせる練習だ。自分の身体から自動ドアに反応する自分を切り分けて、反応する場所に持っていく。自分から滲み出る自分という成分を、自分を取り巻くオーラのように操ってドアを攻略していくのだ。世の中にある自動ドアなら、問題なく通れるようになった。アパートの自動ドアの前で立ち往生することもない。

白い部屋にあるドアも、一つ、また一つと開くようになった。その間、俺は友人と疎遠になり、恋人には愛想をつかされ、一人になった。そして、俺と最後のドアだけが残った。しかしまだ開かなかった。

壊れているのではないか、別の人を連れてくればいいのか、一生この扉が開かなくてもいいのではないか……疑念は抱いたが、最後まで自分で行かなければ意味が無いと思った。

ある日、男が一人やってきた。自分よりずっと若く、ここで働かせてくれと俺に言った。俺は質問した。君の生涯にたった一つだけ扉があるとしたら、それはいつだ。彼は答えた。

「それは過去にあった。あの扉を通ったから俺はここにいる」

俺はかつて聞いたのと同じ説明をした。彼は帰った。今度こそ、上手くやるんだ。

扉の前に立つ。目を閉じてイメージする。今も毎日通る、しかしあの日、確かに通ることのできなかつた自動ドア。その向こう側へ、足を踏み出す。壁は無い。目を開くとそこはアパートの前で、朝の陽ざしが眩しかった。時計を確認する。採用面接まで、あまり時間が無い。俺は駅へと走り出した。

……ちょっと待て。あの日に戻ってしばらく経ったが、俺は納得していなかった。第一志望の会社の内定を受けて、ようやくそのことに気が付いた。

転職した男、別の部署に移った男、彼らと俺に何の違いがあると言うのだ。俺が通るべき本物の扉は、こんなものではないはずだ。俺の運命はこんなつまらないものじゃないはずだ。その日からまた、練習を欠かさなかった。自動ドアから自分を隠す練習だ。自分の身体から自動ドアに反応する自分を切り分けて、反応しない場所に持っていく。自分から滲み出るオーラを自分の身体に閉じ込めて、道を再構築していくのだ。

気づいたことがあった。自分が通れないようにできる自動ドアというのは一方通行なのだ。弁のようなもので、通れない壁だと思っても逆からは通ることができた。自分の前に広がる迷路は、その様相を新たににした。

そうして再び白い部屋にたどり着いた。

ここで働かせてください、俺はそう言った。男は問う。

「君の生涯にたった一つだけ扉があるとしたら、それはいつだ？」

答えは用意していた。それは未来にある。いつかは分からないが、いつかその時が来る。

男は俺の回答について何も言わなかった。明日から好きな時に来い。仕事は、ここに好きな時に来ることだ。扉が待っている。……それだけ言うと、男は何も話さなくなった。俺も、何も聞かなかった。そして、俺は入ってきたのと同じ自動ドアから帰っていった。

次にその部屋に入った時、男がいた。あれ以来、部屋勤めの人間は俺と彼の二人になった。白い部屋にあるドアを、一つ、また一つと攻略していった。その間は友人とも、一回目の時は別れてしまった恋人とも、上手くやった。

そして、俺と一人の男と、最後のドアだけが残った。まだ開かなかった。二人の他に来者はいない。長い年月が経った。ある日、退職しようとした俺に、引退することになった、と男は言った。もうそんな年か、また俺だけが残った。

未だ開くことのない自動ドア、あれは結局俺だけのためにあるのだと思った。必ずその扉を開かなければならない。

俺はその扉に映る自分の姿を見つめ続けた。皺が増え、背丈が心なしか小さくなり、その姿がぼやけるようになった。しかしまだ開かなかった。

一生この扉が開かなくてもいいのではないか、いつそのこと破壊してみようか……そんな考えが頭をよぎったが、疑念は抱かなかった。部屋に来る時は、必ず扉の前に立ち続けた。動かずとも、俺の身体から滲み出る自分は自由に部屋を動き回った。

いつも通り出勤し、ドアの前に立つ。ついに、俺のオーラが扉を侵食し、その向こう側に到達した。ドアが開く。すると、反対側から男が歩いて来た。俺は問うた。

「俺の生涯にたった一つだけ扉があると、その先は何だ」

男は答えない。そのまま部屋に入ってくる。俺は、その向こう側へ足を踏み出す。後ろでドアが閉まる音がした。質問を変える。

「扉は、どこにある」

こちらから通れなくなった自動ドアと暗闇の間から、俺は白い部屋の中に自分がいないことを認めた。男はこちらに聞こえるように大声で言った。

「たった今失われた。そもそも、そんなものは無いのだ。俺は家に帰る。もうこの部屋が、新たに門番を採用することも無いだろう」